

幼老複合施設における異世代交流の取り組み(2)

通所介護施設と保育園の複合事例を中心に

研究開発室 北村 安樹子

目次

1. 研究の背景と問題意識	5
2. 幼老複合施設における異世代交流の実態	6
3. 調査結果のまとめ	11
4. おわりに	13

要旨

公共施設の複合化は、施設整備コストの削減という財政事情を背景とする流れであるが、幼老複合施設では世代間交流の促進というソフト面での副次効果も期待されている。本研究では、高齢者の通所介護施設と保育園の複合事例に対し、幼老交流の実態と利用者への影響を探るためのヒアリング調査を実施した。

計画交流には、行事交流のほか、レクリエーションや創作・芸術活動、食事、スキンシップ・会話などのメニューがある。通所介護施設では、利用者の顔ぶれが日によって異なるため、個と個の継続的な関係につながるようにとの配慮から交流相手の組み合わせに配慮したり、交流時の子どもの人数を5～8人程度の少人数単位にしている事例もある。

施設の経過年数とともに、デイサービス利用者の自立度が低下し、痴呆症状をともなう人が増える傾向にある。こうした変化は、高齢者が施設内を移動する際に体力的な負担を強いたり、間接的には職員の負担につながっている。高齢者の自立度の変化に応じて計画交流のメニューを変化させたり、安全管理などの面から施設の開放性を見直している事例もある。

保育士と介護専門職は養成課程が独立であり、多くの幼老複合施設には双方のケアに通ずる専門の職員がいない。世代間交流の促進を目的とする施設を整備する際には、交流のメニューに関する情報提供や幼老統合ケアに関する職員の研修制度などについても考えていく必要がある。

既存の幼老複合施設や関係者をつなぐネットワークはなく、それぞれの施設は独自の試行錯誤を重ねて交流の形や効果を模索している。幼老各施設のケアスタッフや施設管理者、管轄の行政担当者などを含めて、他施設がどのような交流を行い、どのような課題を抱えているかについて互いに情報を共有するための仕組みを整えていくことが重要であろう。

キーワード：幼老複合施設、幼老統合ケア、世代間交流

1. 研究の背景と問題意識

(1) 研究の背景

少子高齢化の進行を背景に、急速に増加する高齢者が安心して充実した老後生活を送ることができるよう、さまざまな福祉関連施設や介護サービス基盤を早急に整備することが求められている。一方で、子育て中の親が安心して子どもを育てられるような社会的支援体制の充実や、子どもたちを豊かな環境の中で育むための地域社会づくりも、わが国が抱える重要な政策課題の1つとなっている。これまでの福祉政策では、これらの高齢者福祉施策や子育て支援策が、縦割りの行政システムの中で、それぞれ独立して進められてきた。しかし、近年ではこうした縦割りの垣根を超えて、高齢者福祉施策と子育て支援策を融合・連携する動きがさまざまな形で始まっている。

一例に、幼老施設の複合化の流れがあげられる。厳しい財政状況の中、近年の公共施設整備においては、複数の施設を合築・併設したり、既存施設の一部を他施設に転用する事例が増加している。「幼老複合施設」とは、保育園や児童館、小学校などの子ども用の施設と、老人ホームやデイサービスセンターなどの高齢者施設の合築・併設（を含む）事例を指す。幼老複合施設にはさまざまな種類があるため^{*1}、全国的な状況をトータルに把握できるような統計はない。しかし、例えば保育園と老人福祉施設の併設（複合）状況についていえば、2000年10月時点で、老人福祉施設を併設する保育園は全国で564カ所となっている（厚生労働省『社会福祉施設等調査』）。

都市部など施設整備のための用地確保が難しい地域では、既存施設に他の施設を合築・併設したり、新規整備の際に複数の施設機能を盛りこむことで、施設を単独で整備する場合に比べて整備コストを大幅に抑えることができる。このため公共施設の複合化整備に関しては、政策面でもさまざまな後押しがある。例えば厚生労働省では、2002年度の中心市街地活性化促進施策の一環として、都市部において既存施設を老人福祉施設など緊急度の高い施設と複合化する場合には、優先的採択や補助面積加算などの優遇措置を実施している。

(2) 問題意識

幼老施設の複合化は、国や自治体の厳しい財政事情を背景とする流れであるが、一方で複数の施設を空間的に一体化することで、ノーマライゼーションの理念に基づく世代間交流の促進という副次効果も期待されている。しかし、増加する幼老複合施設で実際にどのような交流が行われているのか、高齢者と子どもは互いにどのような影響を与えているのかなど、その実態に関する情報は極めて少ない。

筆者は、2002年から2003年にかけて、全国の幼老複合施設15事例を対象とするヒアリング調査を実施し、子ども施設と高齢者施設のハード・ソフト両面に関する複合状況を探った（北村 2003）。その結果、先進的な事例では、施設内での世代間交流が、

利用者の精神面や身体面に直接効果を与えているほか、利用者から家族・地域住民へ、施設内から施設外へと交流の範囲が広がっていることが明らかになった。

今回の調査研究では、調査対象を高齢者の通所介護施設と保育園の複合事例に絞り、^{*2}建物や空間配置にみられる構造上の特徴（ハード面）及び交流の実態や施設利用者への影響（ソフト面）の複合状況を探るためのヒアリング調査を実施した。本稿では、交流の方法や内容が特徴的であった3事例について紹介する。

2. 幼老複合施設における異世代交流の実態

(1) 事例1: たけのうち保育園・東淵野辺デイサービスセンター (神奈川県相模原市)

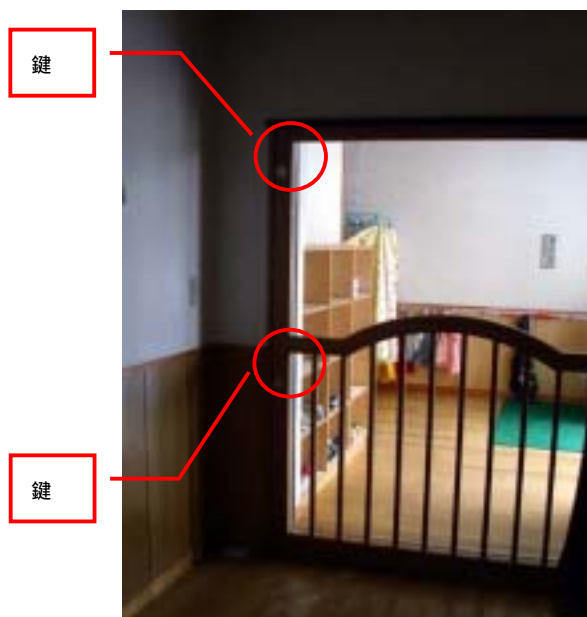
1) 施設概要

複合施設開設年	2000年4月
運営主体	社会福祉法人たけのうち福祉会
設立経緯	地域に保育施設と老人施設を設置する必要が生じ、市の依頼を受けて新設。核家族化などにより家庭や地域での高齢者と子どものかかわりが減少しているため、複合施設とすることで世代間の交流促進や相乗効果を目的としている。
建物の構造	合築型（鉄筋コンクリート造 地上3階建）

2) 建物の構造・空間配置・設備面の特徴





デイサービスセンターと保育園は、1階でつながっている。境界部に設置されている扉は、両施設の職員や利用者が互いの様子を感じられるようフェンス状になっている（図表1）。境界扉には上下2カ所に鍵があり、下の鍵には子どもやデイサービス利用者の手が届くが、上の鍵には届かない。安全管理上の問題から、通常は上部のメインロックで施錠管理し、必要時のみ開けて行き来している。

図表1 保育園スペースとデイサービスセンタースペースを区切る境界扉



注1：フェンス状の境界扉の奥が保育園のスペース、手前がデイサービスセンターのスペースとなっている。

注2：境界扉は、両施設の様子が視覚的にも、聴覚的にも互いに感じられるよう、フェンス状の形状となっている。

注3：境界扉は上下2カ所の鍵（、）で制御する。鍵には子どもや高齢者の手が届き、自ら開閉することも可能であるが、メインロックである鍵は職員のみが操作する。

3) 交流の実態

開設以来、段階的に交流の形を模索してきた。開設1年目は、園児が出し物を発表する行事交流が中心であったが、2年目からは工作やゲームなどの共同作業を開始し、3年目以降はさらに日常的な交流を目指している。また、1年目は年に3回程度、2年目は月に1回程度と交流の頻度を増やしてきたが、3年目からは回数に制限を設けることなく、クラス単位で時間帯やメニューを設定し、交流の時間を設けている。

a) 計画交流*³

開設4年目からは、年長の園児が5～6人の少人数単位でデイサービスセンターを訪れ、レクリエーションやゲームなどを行っている。園児1人あたりにすると、週に1回程度のペースでデイサービスセンターを訪れることになる。

交流相手の組み合わせについては、園児とデイサービス利用者ができるだけ同じ顔合わせになるよう配慮している。また、互いに名札をつけて、名前や顔を覚え合う関係になることを目指している。交流メニューには、カードゲームや折り紙、囲碁、風船バレーなどのレクリエーションが多い。必ずしも同じメニューを固定的に行うわけではなく、園児や高齢者の意向を聞いてその場で決めることもある。

年中以下の園児については、年に2～3回程度、保育士がデイサービスセンターに連れていき、会話やスキンシップなどの形でふれあいの時間をもつようにしている。

b) 自然発生交流

厨房から園児が自分のおやつを運んで来る際などに、デイサービスセンターの食堂スペースを横切っていく場合があり、その際には互いに声をかけ合う。

4) 交流による効果

園長によると、開設当初は、園児たちの多くが交流会に参加しているような感覚であったが、継続的な交流の結果、3年目あたりからは、知っている高齢者が身近にいるという感覚をもち始めたという。また、幼児くらいの年齢になると、高齢者といっしょに生活しているというはっきりとした認識をもっているようである。園児の保護者も、多くが高齢者と子どもの交流に理解を示し、交流の効果を評価している。普段会うことのない祖父母などに対して、子どもがいろいろな面で気がつくようになったという話も聞かれるという。

デイサービス職員によると、普段は表情の乏しい高齢者が、子どもには笑顔で対応する場面がたびたびみられるという。なかには子どもとのふれあいが、施設に来る動機づけとなって、継続的な利用につながっている人もいるという。また、子どもがやって来る時間帯は、デイサービスの場が和むのを感じるという。

5) 運営上の特徴、工夫、課題

建物の構造上は、子どもが自身で境界扉を開けて自由に高齢者に会いに行くことが

可能である。このため以前は保育活動中に子どもが勝手に行ってしまうことがあり、安全管理上どのように対応すべきかが問題になった。現在は、子どもだけで行くことのないよう園児に指導するとともに、原則として境界扉は施錠している。

園長によると、年々さまざまな視点から交流の方向性を検討しているが、子どもの年齢や高齢者の自立度に応じた交流形態を検討する必要があると感じているという。その背景には、施設の経過年数とともに、デイサービス利用者の自立度が衰えていることがあげられる。車椅子利用者や痴呆症状のみられる利用者も次第に増加しており、こうした利用者を含めた交流のあり方が今後の課題であるとのことであった。

(2) 事例2：高浜市立南部保育園・南部デイサービスセンター（愛知県高浜市）

1) 施設概要

複合施設開設年	1999年4月
運営主体	保育園：高浜市が高浜市社会福祉協議会に委託 デイサービスセンター：高浜市社会福祉協議会
設立経緯	保育園の改修期に合わせて、運営を市直営から社会福祉協議会に委託すると同時に、高齢者のデイサービスセンターを併設した。
建物の構造	併設型（鉄筋コンクリート造 平屋造）

2) 建物の構造・空間配置・設備面の特徴

保育園の園庭をコの字型に囲むようにして両施設が配置されている。デイサービスセンターの食堂スペースから、園庭の様子がみえるよう設計されている（図表2）。

両施設の境界部分には、共用スペースである厨房が配置されている。境界部の扉は、通常閉めているものの、施錠はしておらず、必要に応じて行き来している。

図表2 デイサービスセンターの食堂からみた園庭の様子



注1：正面奥が保育園の職員室、右手奥が保育園スペースとなっている。

注2：デイサービスセンターの食堂スペースからは、園庭で遊ぶ園児の姿が目に入るだけでなく、子どもたちの歓声が聞こえてくる。

3) 交流の実態

a) 計画交流

1カ月のうち1週間をあてて、年長クラスの園児が6人程度ずつデイサービスセン

ターを訪れ、両施設が合同で誕生日会などの行事交流を行う。デイサービスセンターには、職員が製作した紙粘土製の誕生日ケーキが置いてあり、誕生日を迎える園児は、そのケーキのろうそくを皆の前で吹き消す。園児にとって、この行為はたいへんな楽しみとなっていることから、園児の多くが誕生日会を楽しみにしているという。

このほか乳児を中心に、保育士が不定期にデイサービスセンターに連れて行き、スキンシップなどを通じて利用者とのふれあいを行っている。

b)自然発生交流

園児が園庭で遊ぶ際には、デイサービスの食堂スペースで過ごす利用者に向かってガラス戸を軽くたたいてふざけたり、声をかけたりする様子がみられるという。また、園児の保護者からの提案で、卒園の際、園児は保護者とともにデイサービスセンターを訪れ、利用者にお礼を述べることになっている。

このほか卒園児が七五三の着物を着て保育園をたずねて来た際に、デイサービス利用者にもみせに行き、非常に喜ばれたことがある。地域社会を含めたさまざまな形で、自然な交流の機会が増えてきているという。

4)交流の効果

園長や保育士によると、普段はこの保育園を利用していない一時保育の子どもと、この保育園の園児では高齢者との接し方が全く異なるという。日頃高齢者とかかわっていない子どもが高齢者の中にうまく入っていけない様子を目にし、高齢者への抵抗感などの点で、子どもの成長過程における日常生活の影響力の大きさを痛感しているという。

5)運営上の特徴、工夫、課題

双方の施設に、交流活動に関する担当者を置き、月に1回程度の打ち合わせを行っている。計画交流を行う際は、園児の理解と自覚を促すために、デイサービスセンターの職員が、各回の交流活動の内容などについて説明を行うようにしている。以前はこの手続きを行っていなかったため、園児は何をするのか、なぜデイサービスに行くのかをまったく理解していなかったが、この説明を受けることにより、交流の位置づけを理解し、参加への主体性がみられるようになった。

園長によると、開設当初は計画交流にかなり力を入れていたが、最近ではその方向性を見直していこうと思う気持ちもあるという。施設ができてから年数も経過し、施設と地域社会とのつながりが次第に増えてきたため、あえて積極的に交流の機会を設定しなくても、さまざまな形で自然な交流が可能となってきたことがその理由である。園長によると、保育園が地域社会とのかかわりをもっていれば、園児とデイサービス利用者とのかかわりも自然に生まれてくるので、今後も地域社会とのかかわりを大切にしていきたいという。

(3)事例3:塩尻市立東保育園・ふれあいセンターみどりの郷(長野県塩尻市)

1)施設概要

複合施設開設年	2002年4月
運営主体	塩尻市
設立経緯	次の3つの目的から複合施設設立計画がもちあがった。 塩尻市「市立保育施設整備計画」に基づき、2002年4月に近隣の3園(西条保育園、上柿沢保育園、塩尻保育園)を統合し、保育環境の向上をはかる。 塩尻市「高齢者いきいき保健福祉計画」に基づき、高齢者の健康と生きがいづくり、生活支援の増進をはかる。 児童と高齢者との世代間交流の推進をはかる。
建物の構造	併設型(鉄筋コンクリート造 平屋造)

2) 建物の構造・空間配置・設備面の特徴

両施設は共用施設である厨房を挟んで併設され、境界扉を境に内部でつながっている(図表3)。境界部の扉は、通常は職員が施錠管理し、必要時のみ開けて利用する。

図表3 建物概観



注1:左奥側が、みどりの郷(デイサービスセンターと老人福祉センター)の入り口。右手手前が保育園の入り口。

注2:両施設の入り口は空間的に離れているため、利用者や保護者が直接顔を合わせる場面は少ない。

3)交流の実態

a)計画交流

園児が1クラスの半分程度にあたる15~20人程度でデイサービスセンターに出向く形で、継続的に交流活動を行っている。活動時間は毎日10~15分であり、時間帯は午前中が多い。年齢にかかわらず、すべての園児が順番に参加している。交流メニューとしては、会話や握手、手遊びなどのスキンシップのほか、簡単なゲームや歌などを含めたレクリエーションなどが多い。

このほか、季節の行事などの際には、全館合同で行事交流を行っている*4。

b)自然発生交流

絵の得意なデイサービス利用者が、園児たちのためにと自分の作品を自ら申し出て保育園に寄贈したことがある。それがきっかけとなって、園児がその人の似顔絵を描いてお礼に贈るなど、さまざまな交流につながっていった。

ハード面については、両施設の入り口が別々に離れており、建物の構造からも、両施設の利用者が接触するスペースがほとんどない。このため、両施設の利用者や保護者などの関係者が顔を合わせる機会は少なく、設立から日が浅いこともあって、全般的にはあいさつや声かけなどがみられることは少ないのが現状である。

4)交流の効果

園長や高齢者施設の施設長によると、スキンシップの際に、園児が手足の不自由な高齢者の手を自分の手に取り、動かす様子を目にすることがあるという。園児に高齢者や身体の不自由な人に対する思いやりが生まれているのを感じるという。

また、高齢者施設の職員によると、痴呆症状があったり、元気がない利用者でも、子どもが近くに来ると、普段職員にはみせることのない表情や反応を示すことがたびたびあるという。

5)運営上の特徴、工夫、課題

高齢者施設の職員によると、デイサービスの利用者の健康状態によって、子どもへの対応の幅が大きく異なるという。このため園児が高齢者とゲームやレクリエーションを行う際に、主体的に反応し、かまってくれる高齢者は人気があるが、痴呆や身体麻痺等であまり反応のない高齢者は人気がないという事態が生じることがある。どのような高齢者とのやりとりも、子どもの発達にとっては重要な教育的効果があると考え、今のところ職員が臨機応変に対応しているが、今後はこうした場合の対応の仕方を含めて、職員がうまくサポートしていく必要性を感じているとのことである。

また、園長や高齢者施設の施設長によると、他の世代間交流型の複合施設でどのような交流が行われているのかを知りたいと思っても、情報を得る機会が少ないという。同様の施設でどのような試みが行われているのか、活動の参考にするためにも全国的な実態に関する情報がほしいとのことであった。

3. 調査結果のまとめ

ここでは、2003年度に実施した調査事例も含めて、通所介護施設と保育園の複合事例における世代間交流の実態や交流による効果について考察する。

(1)計画交流のメニュー

通所介護施設と保育園の複合事例における計画交流のメニューには、図表4のようなものがあげられる。メニューは、園児の年齢や高齢者の健康状態などによって異なっている。園児の年齢については、行事交流は乳児を除くほとんどの年齢、簡単な創作・芸術活動は3～5歳児、レクリエーションや高度な創作・芸術活動などは5歳児

が中心となるケースが多い。また、スキンシップのうち、抱っこ等は乳児が中心、手遊びや肩もみ、握手、会話などはそれ以上の年齢の園児を対象としている例が多い。

一方、高齢者については、同じ創作活動でも、自立度が高い場合には高齢者の側が作品等をつくって園児に贈ったり、つくり方を教えたりしている。こうした傾向は、芸術活動やレクリエーションなどにも共通する。また、スキンシップでは、痴呆高齢者や車椅子利用者も、職員の支援のもとで参加しているところが多い。

図表4 通所介護施設と保育園の複合施設における計画交流のメニュー

分類	内容
行事交流	季節の行事(クリスマス、ひなまつり、敬老会など)、誕生日会、運動会など
レクリエーション	伝統遊び(あやとり、お手玉など)、はさみ将棋、坊主めくり、かるた、クイズ、バルーンなど
創作活動	ビーズ手芸、作品づくり、折り紙、料理・おやつづくりなど
芸術活動	合唱、歌遊び、楽器演奏など
スキンシップ・会話	乳児の抱っこ、手遊び、肩もみ、握手など

(2) 交流方法に関する工夫

1) できるだけ同じ相手と

通所介護施設の場合、施設利用者が各曜日で異なっている場合が多い。このため、計画交流を行う際に、子どもの側の参加者を曜日ごとに替え、高齢者と子どもができるだけ同じ組み合わせになるよう配慮している例が多い(例えば事例1)。こうした事例では、高齢者と子どもが個人を認識し、継続的な関係を結べるようにとの狙いから、このような工夫を行っている。

2) 子どもは少人数単位で

図表4に示した各メニューのうち、行事交流を除くほとんどのメニューで、園児側を5～8人程度の少人数単位にしている例が多い(例えば事例1、2)。理由としては、子どもの人数が多すぎると対応が難しくなること、子どもが興奮したり騒がしくなりすぎること、個別交流につながりにくいこと、などがあげられる。一方、高齢者の側は、その日来ている人のほとんどが参加している場合が多く、園児の人数が比較的多かった事例2を含め、高齢者に対して子どもの人数を少なくしている。

3) 子どもの苦手な高齢者への配慮

高齢者の中には、子どもが苦手であったり、かかわりたくないという人もいる。こうした利用者には個別の対応をしている事例が多い。交流活動への参加を強制的にしないことはもちろんのこと、施設利用の曜日に配慮したり、テーブルを囲んでゲームなどを行う場合に、高齢者と子どもの混合メンバーで囲むテーブルと高齢者だけのテーブルを用意するなどして対応している事例があげられる(例えば事例1、2)。

(3) 幼老複合施設における世代間交流の効果

世代間交流の効果は、両世代それぞれに観察されている。自立度の高い高齢者では子どもとの双方向的なコミュニケーションを通じて、子どもに教えたり、子どもから慕われることが自信や生きがいにつながっている。また、痴呆症状のある高齢者が子どもとの接触により普段みせない反応を示す、などの例もみられる。一方、子どもの側も、自分の存在が高齢者から喜ばれることが自信となり、年老いた世代や体の不自由な人に対する理解が深まっている様子が保育士や保護者を通じて観察されている。

これらの効果は、必ずしも複合施設でしか得られないものではない。空間が離れていても、訪問交流などの形で機会を設ければ、同様の効果を得られる可能性はある。ただし、できるだけ日常的に、自然な形で互いの存在を感じ合うという距離感は、幼老複合施設ならではといえる面もあるだろう。

また、複合施設という施設のかたちは、幼老両世代への直接効果に加えて、地域社会への間接効果をもたらしている面もある。例えば、一部の事例では、卒園児が夏休みのボランティアとして施設に戻ってきたり、園児の保護者を通じて高齢者施設に対する地域社会の理解が深まる、といった影響がみられる。こうした効果が実を結ぶまでには、ある程度の経過年数と交流への継続的な取り組みが必要となるが、同じ施設を多世代が利用することにより、直接・間接のさまざまな相乗効果が地域社会に広がっていくという構図は、複合という施設の形によるところも大きいと思われる。

4. おわりに

以上の結果をふまえ、以下では幼老施設の複合化という施設整備の方向性に関して、4つの課題を指摘したい。

(1) 幼老統合ケアに関する支援

調査結果にみられるように、計画交流のメニューには園児の年齢や高齢者の自立度によってさまざまな例があげられるが、交流を実施する際に重要なポイントとなっていた点は、職員の対応能力や支援の姿勢である。

現在、高齢者と子どものケアにかかわる人材は、それぞれ独立の専門課程で養成されている。このため、高齢者施設の職員は子どもへの、保育士は高齢者への対応に関するスキルや知識に乏しい。保育士がホームヘルパーの資格を自助努力で取得した例などもみられるが、あくまで個人的なスキルアップにとどまっている。世代間交流促進を目的とする施設を整備する際には、幼老統合ケア(広井編 2000)のメニューやサポート方法に関する職員の研修制度などについても考えていく必要があるだろう。

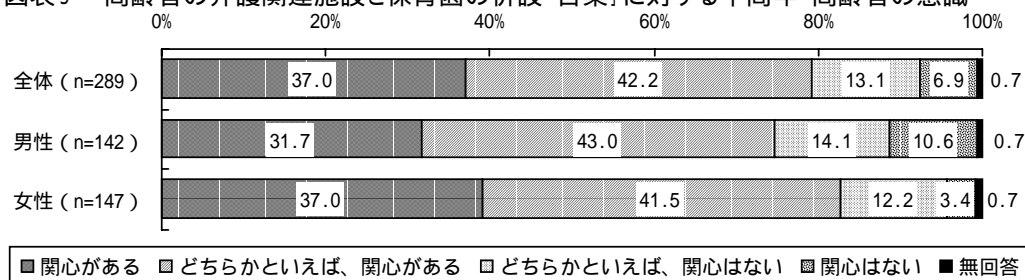
(2) 複合化へのニーズ

筆者が介護施設のプレ利用者でもある中高年・高齢者層を対象に実施したアンケート

ト調査によると、子どもとの交流に関心をもつ人は7割を占め、幼老施設の複合化施策にも約7割が関心を示している(図表5)。すなわち、幼老複合施設の利用者ニーズという点では、支持の方向にあると考えてよいと思われる。

ただし、中高年や高齢者のなかには、子どもが苦手という人もいる。幼老複合という施設の形や、幼老交流というソフト面での複合は、施設やケアの選択肢の1つとして位置づけられるべきものであることはいうまでもないだろう。

図表5 「高齢者の介護関連施設と保育園の併設・合築」に対する中高年・高齢者の意識



注：調査対象者は、全国に居住する50～79歳の男女300名。調査時期は、2003年12月。
資料：北村安樹子,2004,「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」『LD Report 9月号』第一生命経済研究所

(3) 高齢者の自立度低下への対応

通所介護施設に限らず、現在、多くの介護関連施設では、施設の経過年数とともに利用者の自立度が低下し、痴呆症状をともなう利用者が増える傾向にある。こうした変化は、高齢者が施設内を移動する際に体力的な負担を強いたり、間接的には職員の負担につながっている。幼老複合施設の場合、開設当初に想定していた交流の方法や形が、高齢者の健康状態や施設利用者層の変化にともなって困難になり、交流のメニューを変更したり、安全管理などの面から施設の開放性を見直している事例もみられる。こうした課題についても、今後は対応を考えていく必要があると思われる。

(4) 関係者のネットワークづくり

高齢者の介護関連施設に関しては、これまでのいわゆる大規模な施設整備という方向性には財政面からも限界が指摘されており、地域密着型の小規模多機能ホームがこれに代わる新しい役割を期待されている*5。このうち、高齢者や障害者、子どもなど多様な人々が利用する共生型の小規模施設は、「富山型」「宅幼老所」「地域共生ホーム」など、多様な形ですでにいくつかの地域に根づきはじめている。これらの共生型の小規模施設と、幼老複合施設では、施設の規模や提供されるケアの形も異なるが、ノーマライゼーションの理念に基づき、子どもと高齢者の世代間交流から生まれる相乗効果を重視する姿勢については共通している。

事例3でも聞かれたように、既存の幼老複合施設の関係者をつなぐネットワークはなく、それぞれの施設は独自の試行錯誤を重ねて交流の形や効果を模索している。今

後は、施設の規模や種類にかかわらず、幼老統合ケアにかかわるさまざまな施設・行政の関係者が、幼老統合ケアの実態や課題、あるいは発展可能性などについて互いに率直に議論し合えるようなネットワークづくりが求められよう。

(研究開発室 副主任研究員)

【注釈】

- *1 幼老複合施設には、施設の組み合わせや建物の構造、運営・設置の形態などによってさまざまな分類が考えられる。詳細は北村(2003)を参照のこと。
- *2 ヒアリング対象施設を通所介護施設と保育園の複合事例に絞った理由としては、全国1,000の地方自治体を対象に行われた調査で、もっとも幼老複合施設の事例が高齢者のデイサービス関連施設と保育園の複合事例であると報告されていること(広井編 2000)。今後の高齢者福祉施策では施設介護から在宅介護・介護予防の比重を高める必要性が指摘されており、在宅を基本とする通所施設の役割が重要性を増していると考えられること、などがあげられる。
- *3 本研究では、職員が交流の内容や形態を企画し、機会を設定する「計画交流」と、計画はなく自然に発生する「自然発生交流」に分けてとらえている。
- *4 このほか、老人福祉センターと保育園では、月に3回程度、年少から年長クラスの園児がクラス単位で交流活動を行っている。
- *5 厚生労働省の社会保障審議会介護保険部会が2004年7月に提出した『介護保険制度の見直しに関する意見』では、地域密着型の新たな介護サービス基盤として身近な生活圏域で「通い」「泊まり」「訪問」「居住」などの機能を組み合わせ、継続的・包括的に提供する「小規模・多機能型」サービス拠点の整備を提言している。その詳細については未定だが、現在各地域に多様な形で展開する共生型の小規模施設についても、その制度上の位置づけが今後注目されるところである。

【参考文献】

- ・浅沼由紀他, 2002, 『高齢者複合施設』市ヶ谷出版社。
- ・白石真澄, 2000, 「多世代交流を支援するまちづくり」『都市計画』, 227: 9-14。
- ・北村安樹子, 2003, 「幼老複合施設における異世代交流の取り組み」『Life Design Report (2003年8月号)』第一生命経済研究所。
- ・北村安樹子, 2004, 「シニア・シルバー層の世代間交流の実態と意識」『Life Design Report (2004年9月号)』第一生命経済研究所。
- ・多湖光宗編, 2003, 『痴呆老人力を子育てに生かす』社会福祉法人自立共生会。
- ・広井良典, 1997, 「ケア学 越境するケアへ」医学書院。
- ・広井良典編, 2000, 『「老人と子ども」統合ケア』中央法規出版。